国際交流員ファラからのお知らせ　2023年6月

『えひめ人権・同和教育　第152号』に記事を掲載させていただきました！一部修正したものをここでご紹介いたします。記事は20～23ページに掲載されておりますので、ぜひ手にとってご覧ください！

知らなければ愛せない

瞬く間に4年が過ぎ去ろうとしています。令和最初の夏、熱気溢れる「男祭り」で有名な新居浜市の国際交流員として着任した日を、昨日のことのように今でも覚えています。漂うみかんの香り、湿った夏の空気、次から次へと上陸した台風、どれもインパクトが強かったのですが、何より印象に残ったのは、それらに負けない地元の方々の温かさと優しさでした。行く先々で「愛顔」で迎えられて、愛媛の皆様の温かい歓迎が心に響きました。これがいわゆる日本の「おもてなし」というものなのでしょうか？

「お・も・て・な・し」という言葉は、テレビアナウンサーの滝川クリステル氏が2013年に国際オリンピック委員会（IOC）の総会で発表したことから、世界に広まりました。オリンピックに向けて、日本がより多くの外国人観光客を迎え入れるために体現されたこの素晴らしい精神は、都会から地方まで、日本全国で味わうことができます。海外から来たお客様が日本を最大限満喫できるように、多言語の情報から宗教に配慮したお食事まで、様々なサービスが提供されて、全力で歓迎しようとしているその姿勢をみて、非常に感動しました。

日本は変わりました。

私が日本に留学しに来たのは、2007年、春のことでした。当時、外国人の数は今ほど多くなくて、その珍しさからなのか、登録上では「エイリアン[1]」として分類されていました。特に、私のようなヒジャーブ（スカーフ）を巻いている東南アジアのムスリム（イスラム教徒）女性は、どこに行っても注目されて、時には警戒されて、コミュニティに溶け込むことはなかなか難しかったです。それどころか、不審に思われたこともよくあって、日中に街中を歩いていると、理由もなく警察官に呼び止められて、職務質問されることだって珍しいハプニングではありませんでした。

その頃は、世界中で起こっていたテロ事件の影響を受けて、似たような経験をした外国人は多かったでしょう。テレビに映っている悪い人たちと似た外見を持つ者が警戒されるのは、無理のないことかもしれません。しかし、お互いの国や文化、宗教などに対する理解が足りなかったことから生まれた偏見に打ち勝てなかったのは、何より残念でした。警察官に呼び止められたのは、あくまでも地域住民の安全を守るための手段だと、ちゃんと理解していました。とはいえ、当時17歳だった私にとっては、自分がその「地域住民」としてカウントされなかったことも、守るべき一人の「女の子」としてではなく、警戒すべき「不審なガイジン」としてしか見られなかったことも、痛すぎる現実でした。これはもちろん、楽しい思い出に満ち溢れた留学時代のごく一部の経験に過ぎませんが、この経験があったからこそ、自分の国や文化、宗教などについて多くの人に知ってもらいたいという思いが芽生え、今の道を選びました。

日本にいる外国人の数は近年増加し続けていて、新居浜市のような小さなまちでさえ、約1,400人に上る外国人が在住しています。この数字は、1～2週間で帰国する「お客様」ではなくて、今現在、一緒の職場で働いている「同僚」、一緒のアパートに住んでいる「お隣さん」、一緒の学校に通っている「仲間」の数を指しています。果たして日本は、こんなにも多くの外国人をコミュニティの一員として受け入れる覚悟はできているのでしょうか？知らない「ガイジン」が周りに増えていくのは、地元の方々にとって非常に不安なことだと思いますが、多くの外国人の心の声を代弁して伝えますと「私たちだって、慣れない国で暮らすのは不安です」。こんな時に、国籍や文化の壁を越えて共に生きていくには、どうすればいいのでしょうか？

[1] 2012年まで使用されていた「外国人登録証明書」は、英語で“Certificate of Alien Registration”といいます。“Alien（エイリアン）”とは、英語で「外国人」または「異星人」という意味もあります。

国際交流員ファラからのお知らせ

2023年6月

私の母国マレーシアでは、こんなことわざがあります。“Tak kenal maka tak cinta”、「知らなければ愛せない」という意味です。人は知らないことを恐れる傾向があります。理解できないから怖い、怖いから嫌い、嫌いだから理解しようとしない。この繰り返しから抜け出す方法はただ一つ、「お互いのことを知って、理解し合おうとすること」です。それができるのは、国や政府による政策やルールを通してではありません。私たち、一人一人が一歩を踏み出して、お互いのことを知ろうと思う心を持たなければ始まりません。一人一人が心を開けば、ゆっくりと確実に地域にも影響を及ぼして、やがて皆にとってより暮らしやすい社会を作ることができると信じています。そんな思いを胸に抱いて、私は現在、新居浜市で国際交流員として働いています。

私の新居浜市での生活は、15年前の経験と比べて、まったくもって違うものです。「不審なガイジン」としてではなく、ちゃんと社会の一員として受け入れてくださって、周りの方々に優しく包まれながら日々を送っています。しかし、国籍や文化の壁を完全に乗り越えられたわけではなく、常に「マレーシア」という国や「イスラム教」という宗教を背負っていることを意識しながら生きています。これらはすべて自分のアイデンティティであって、もちろん、誇りに思っていることですが、「マレーシアのファラ」としてではなくて、ただ単に一人の「女の子」として見られたいと思う17歳の頃の自分が、心のどこかにいるのが本音です。

国際交流員としての任期が満了するとともに、新居浜市を離れる日もどんどん近づいてきています。いつか、「私」のことを知って、愛してくれる日が来るのでしょうか？

新居浜市の国際化及び多文化共生を推進するために、様々な文化交流イベントや異文化理解講座などを開催しています。マレーシアの文化を紹介するほか、以下のような講演・企画も行っています。

講演：「私から見た日本」

15年前の日本と現在の日本や、外国人が日本で直面する問題、今後の課題などについて、多文化共生社会の実現をテーマとした講演。

ワークショップ：「異文化コミュニケーション」

新居浜市の国際化の現状と、異なる言語・文化・背景を持つ人たちとコミュニケーションを取る際に必要なスキルを上げるためのワークショップ。

都市間交流：「新居浜市×マレーシア・スバンジャヤ市　オンライン文化交流会」

マレーシア・スバンジャヤ市の市民の方々とZoomで繋いで、画面越しでパフォーマンスを披露してお互いの文化を紹介し合う企画。音楽や踊りなどを通して言葉の壁を乗り越え、楽しく異文化理解を深めることが目的。

学校間交流：「別子中学校×マレーシア・トゥン・ガファー・ババ・マラ・ジュニア理科カレッジ（MRSM TGB）英語によるオンライン国際交流」

学生が英語を使って、お互いの国や学校など、決められたテーマについて発表し合うプログラム。文化や生活習慣が異なる同年代の人たちの考え方に触れることによって、グローバルマインドセットを育てることが目的。